

あるむぜお61

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO.61

2002年9月20日



府中ロストワールド

2

目次

- 1-2 府中ロストワールド
- 3 ミニ展紹介
- 4-5 ノート「国府の遊女」
- 6 最近の発掘調査から
- 7 発掘事始2
- 8 展示室から・元気！ボランティアだより

die ewige Wiederkehr

村野四郎

トンボもどじょうも
減っちゃった という
木犀のさかなくなってしまった村の
秋をあるく





ぼろぼろな神さまのいる
あの祠の森に
地球の最後のセミが
いっぴき鳴く日は
どんなにさみしいだろう

ハイウェイは村をよこぎり
「よるこばしき知恵」に沿うて
めくるめくように 遠く
遠く
天の森閑に消えている
子供がひとり
梨を食いながら
向うの方へ歩いていく

府中ロストワールド

記録の中にしかみることのできない失われた風景を
1980年(昭和55) 府中市発行の
写真集「むかしの府中」に探してみます

2 緑陰の清水

「むかしの府中」No.214

1923年(大正12)7月

現 府中市白糸台5丁目地内

かつての府中・・・江戸末期の慶応から昭和初期にかけての立川段丘崖では、いわゆるハケの湧水(湧き水)を利用したワサビ栽培が盛んに行われていたといえます。現在の白糸台にあたる府中東部、多磨村の車返地区において、まさに「府中ワサビ」の商標で生産され、20軒を越す農家を数えていたそうです。

さて、ワサビは10～13℃くらいの冷涼な気候を好み、直射日光を嫌うため、北面の溪谷(けいこく)や樹陰地での栽培が適当とされています。常に清澄な、有機物を多く含むことのない流水のある場所を選び、水温は9～12℃が理想的で、季節変動少なく、水量に増減のない所が最適となるのです。この条件に見合ったのがハケ、つまりは段丘崖沿いの場所というわけです。

ご存知のように府中市周辺は、河川の侵食による階段状地形になっています。このような地形を河岸段丘と呼び、多磨川低地より低い方から順に立川段丘、武蔵野段丘と名付けられています。崖の部分は、河川の流れに沿って削り取られた段丘崖というわけです。

ではどうして段丘崖に清流が湧き出すのでしょうか？段丘の地層は、浅い海の時代に堆積した上総層群の上にかつての川原であったことを示す証拠の武蔵野礫層(れき)、そして関東ローム、黒土と重なっています。上総層群は砂層ですが、所々に粘土の層があるため水をほとんど通しません。このため地上に降

た雨はすきまのある武蔵野礫層まで浸透し、水脈を作ります。段丘崖では、この地下水脈の浄水層となる段丘砂礫層や不透水層となる粘土層が露出している所があり、湧水となって地表に出現するのです。無論湧水の水質は良質で、水温も14～16℃でほぼ一定です。

このワサビ田、昭和初期には水が汚れ、栽培農家も減り、現在では営む農家は全くなくなりました。因みに昭和30年代始めの頃、最後のワサビ田が姿を消したそうです。原因として考えられるものに、地下水温の上昇(こかつ)、涸渇、同品種の連作による障害等、さまざまな理由があげられますが、決定的だったのは地下水位の低下で湧水が減少したことだといわれています。昭和34年から43年頃までの10年で、地下水位が8m近くも下がるといった記録がありますが、深井戸での地下水を過度に汲み上げたせいなのでしょう。

近年は汚水の浸透で水質も悪化し、また都市化で降雨が地下に浸透しないといった構造にもなっているため湧水そのものが減少している事実は否めません。奥多摩町あたりではまだ細々とワサビ栽培を何とか継続しているようですが、府中では清涼なる水が湧き出す傍らで、かつて栄えたワサビ田の風景が甦(よみがえ)ることはなさそうですが、せめて段丘崖の自然は失わないように心がけたいものです。

(中村 武史)

三二展

10月1日～11月24日

年貢の取り方 納め方

年貢の納め時っていつですか？

今も昔も“税”の類いはあまり聞いて嬉しい言葉ではないようですが……江戸時代の税の中心は“年貢”で、言ってみれば土地の生産量に対して課されたものでした。

ところで、左の長い棒のようなものはいったい何でしょう？ 2.5cm角で長さは190cm、2本あります。上端には紐通しのような穴があいています。

これは市内住吉町の内藤さんからお預かりしている資料ですが「本家にあった検地^{けんち}棹^{さお}だよ、検地の時に田畑^{のさし}を測った物^{もの}差^{さし}なんだ」と伝え聞いてきたそうです。

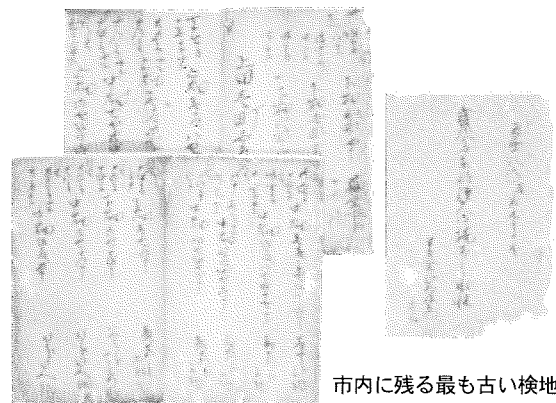
そこで、江戸時代の幕領^{じかぜ}の地方行政^{けんち}について書かれている「^{けんち}県治要略^{けんち}」という本を開いてみると“^{けん}検見^{けん} 坪刈^{つぼかり}之図^{のず}”の頁で、竹棹のようにも見えますが、確かにこんな棒で稻田を区切っている絵がありました。これは、一定基準の区画(1坪)で稲を刈り取って、実際にどれだけ実ったかを量るための作業風景です。この量に^{ちもく}地目毎^{ちもく}に決まっている年貢率を掛けると、その年の単位面積当たりの年貢量が決まります。

そこからさらに個人の年貢量や、村全体の年貢量を算出するには、前提として、田畑1筆毎の地目や面積、等級、誰が払うのか、などの土地の状況を前もって村ごとに調べておかなければいけません。この作業が検地で、この内容を記した土地台帳が検地帳です。検地の時にも測量をするので棹は使ったかも知れませんが、不定形な土地を量るのでたいいは縄を張ります。時々でて来る“御縄入^{おなわいり}の百姓”という言葉は検地帳に名前が載っている、ということです。

この帳面に記載された事は、年貢を取る側にとっても納める側にとっても共に重要な確認事項になりました。なぜなら、取る側には年貢を



「県治要略」より 検見 坪刈之図

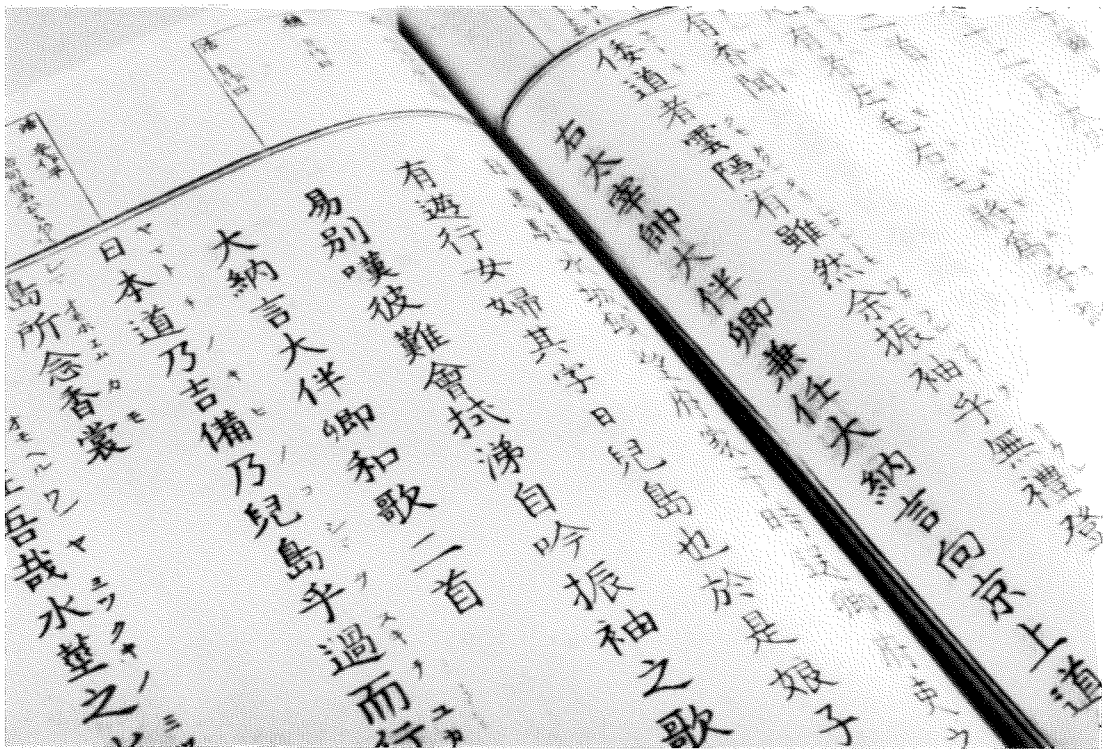


市内に残る最も古い検地帳

天正18年(1590) 常久郷検地帳 市指定文化財

課すべき土地が把握でき、納める側には負担と同時に土地に対する権利も保証されることになったからです。従って検地帳は、村で最重要書類の扱いを受けていました。そのため市内にも多く残されています。

この検地帳を糸口に、館蔵史料の紹介を兼ねながら江戸時代の年貢についてあれこれ探ってみましょう。(B.)



万葉集の遊行女婦「万葉和歌集校異」(本館所蔵)より

むかしむかしの遊女

遊女^{ゆうじょ}というのは、考えてみればおかしい言い方ですね。遊んでいるのは男の方で、女性は体を張ってお仕事しているのですから。これについては「遊び」という言葉の語源が関係していそうです。

もともとアソビとは、神に歌や舞^{まい}を捧げる神聖な行いのことでした。遊女の起源は神に仕える巫女^{みこ}で、性が聖なる行為であった時代の名残は、後世の遊女にも見られるといえます(佐伯順子『遊女の文化史』中公新書1987年)。

もっとも、「遊男」という古い語があるように、神事や祭礼の芸能は男女がともに参加するものだったのが、奈良時代の律令国家成立などを契機に、政治は男・歌舞^{かぶ}は女という分業の図式ができあがり、これが遊女の起源になったともいえます。「遊行女婦」「娘子」と呼ばれた彼女たちは、歌や舞や性のサービスを通じて王権に仕えた専門職で、主な活動の舞台は地方の国府だったのです(服藤早苗「遊行女婦から遊女へ」『日本女性生活史』1 東大出版会 1990年)。

遊女の歌声

奈良時代に活躍する遊行女婦(遊女)たちの歌声を

『万葉集』のなかで聴いてみることにしましょう。

安積山影さへ見ゆる山の井の

浅き心と我が思はなくに

(山の姿が映るほど澄んだ湧き水のように、あなた様のことを深く思っておりますの 巻16-3807)

都からはるばる出張してきた葛城王を迎えた陸奥国府の官人に不手際があり、王は怒る。これを宥めることができたのは「風流びたる娘子」ひとりでした。彼女は、当地の歌枕を詠み込んだこの歌を王の膝を叩きながら(?)歌ったと伝えられています。

倭道は雲隠りたり然れども

わが振る袖をなめしと思ふな

(遠い大和への道は雲に隠れているでしょうけれど、私が袖を振るのを無礼だと思わないでくださいませ 巻6-966)

大宰府長官の任期を終え九州から都へ帰る大伴旅人。これを見送る官人たちに紛れていた遊行女婦が、涙を流して口ずさんだのがこの歌。今でなら、栄転で本社に戻る上司の送別会での光景を思い浮かべてもいいかも知れません。

彼女たちの歌は、やはり任期満了で都へ帰る藤原宇合^{うま}を見送った常陸国府(巻4-521)や、今をときめく大

伴家持を囲んだ越中国府の宴会(巻18-4047・19-4232)でも聴かれました。家持には、「左夫流児」という遊行女婦にゾッコンになった部下を諭す歌(巻18-4106～9)というのまであります。

以上のことから、遊行女婦たちが、都から離れた国府の地にありながら高い教養をもち、和歌の道に優れ、役人(国司)のウケがよく、一目置かれる存在であったことが知られます。

武蔵国府では

それでは、ここ武蔵の国府でも彼女たちの足跡を確かめることができるのでしょうか。『万葉集』には東歌として東国民衆の歌が集められていて、武蔵国の歌も9首ほど見られます。そのうちの1首。

武蔵野の小曲が雉立ち別れ

去にし宵より背ろに逢はなむよ

(武蔵野の崖(?)の雉が飛び去るようにあの方は行ってしまったよ。あの晩から逢っていないのですよ 巻14-3375)

旅立ったまま帰らない男は誰なのか。自由な旅が許されなかった時代、税を納めにあるいは衛士や防人として都か九州に赴く農民でしょうか。はたまた都へ帰る国府の官人でしょうか。

東歌は必ずしも田舎の素朴な民謡ではなく、国府のような先進の地で、国府の官人らが介在して作られたものと思われます。また、武蔵の東歌9首中5首に「武蔵野」が詠まれているなど、作歌の場に共通テーマや集団の存在が感じられます。これに相応しいシチュエーションのひとつとして、国府における宴会を考えてみることもできるのではないのでしょうか。

そもそも遊行女婦の重要な出番のひとつに、国司の歓送迎会があったらしいことは、見てきたとおりです。「武蔵野」の歌5首がすべて女性の歌らしいことも注目すべきで、もしかしたら、これらの歌は国司を送る宴で、彼女らが場を盛り上げるために作ったリップサービスだったのかも知れません。

宿の遊女

鈴が音の早馬駅家のつつみ井の

水とたまへな妹が直手よ

(駅鈴の響く駅家の泉の水を汲んでくださいな。かわいいあの娘の素手で 巻14-3439)

この一首からは、役人の公用専用の駅家にも遊行女婦のような人がいたことを想像させます。平安時代には、任地先の上総から帰京する父菅原孝標に従った『更級日記』の作者が足柄山で聴いたような、世にも美しい遊女の歌声が、東海道の各地の宿でこだましていたはずです。

中世の流通経済の発達により全国の交通が活発化するに従い、その拠点になる宿や湊には多くの遊女が集

まり出しました。サービスの対象を役人一辺倒から民間レベルに門戸を広げ、技も磨かれていったのではないのでしょうか。彼女らは傀儡女・白拍子・曲舞女などの専門集団を作りながら活動し、中世芸能の発展の重要な一翼を担ってきたのです(脇田晴子『女性芸能の源流』角川書店 2001年)。

遊女の変貌

ところが、『更級日記』の作者が遊女の歌に感銘し「このやどりを立たむことさへあかずおぼゆ」(出発するのが心残りだ)と記したことに比べると、鎌倉時代後期に武蔵国川口を訪れた『とはずがたり』の作者二条が「(入間川の)向へには遊女どもの住みがあり」とだけ書いたことは、宿の遊女に対する女性からの眼差に変化があったことを示しています。

鎌倉幕府滅亡のひとつのきっかけになった武蔵国府・分倍河原合戦の場面にも遊女がいたらしいことが『太平記』の記述からわかります。一旦は勝利した幕府軍の男たちは、油断して泥酔状態で遊女と枕を並べていたそうです。そこへ新田義貞の軍が急襲。結果は明らかでした。



分倍河原合戦と遊女「太平記大全」(国会図書館所蔵)より

こうした遊女たちに、かつて国府を舞台に活躍した遊行女婦の面影は感じられません。広範な民衆がひしめき合う新しい都市や宿をターゲットに登場した遊女ではないのでしょうか。国府で激しい合戦が度重なり、国府の政治的機能も、中世都市としての体裁も失われた後、府中ではさらに新しいタイプの遊女が誕生します。江戸時代、宿場町の飯盛女として。

最近の発掘調査

古代のカギ 「クルル鉤」を発見

(仮) 府中駅南口再開発第三地区

府中市遺跡調査会

本間

岳人



出土した「クルル鉤」

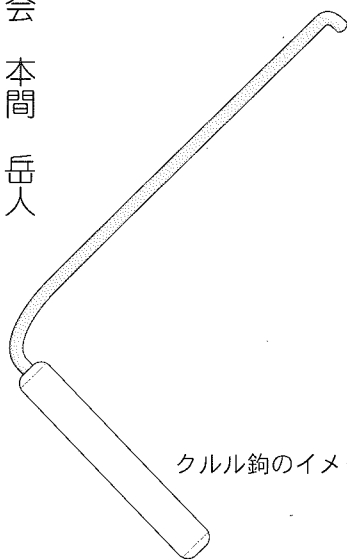
前号に引き続き、府中駅南口再開発第三地区の発掘現場から調査速報をお届けします。

7月下旬、真夏の熱風が吹くなか、平安時代の^{たてあな}竪穴建物跡の床面から、変わった鉄製品が発見されました。見つかった当初は、細部の状態がわからず、^{かぎ}「なんだろう？」と首を傾げていましたが、全体がわかるにつれ、「クルル鉤」と呼ばれるタイプのカギであることが判明しました。

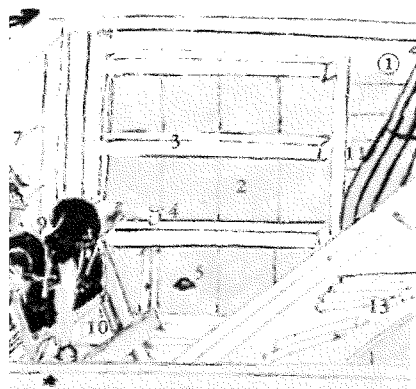
このカギの大きさ・かたちをみますと、太さ5mm前後の鉄の棒をL字状に曲げたもので、L字の長い方が26.5cm、短い方が15.5cmで、長い方の先端の1.3cmほどがフック状に曲げられ、短い方には径2cm・長さ14cmの木製の柄が残っています。先端から柄の部分まで、ほぼ完全なかたちで出土しました。

一見するとカギとは思えない形状をしています。実は、こういったタイプのカギは現在でも土蔵や神社などの扉に使用されている伝統的なカギのひとつです。このカギのしくみは、複雑な仕掛けのある錠前^{じょうぜん}とは異なり、とても簡易なものです。今回の出土品とは年代が異なりますが、左下の絵を参考に使い方を見てみましょう。この絵に描かれた物置は、板戸(2)を閉めると棧(4)が落ちて床の穴にはまり、外側からは開けられない構造になっています。板戸を開けるには、クルル鉤をカギ穴(5)に^さ入れて、カギ先のフックを棧にかけてクルリと引き上げます。棧にはその引っかかりとなる小さな穴も確認できます。

さて、今回の発見にはどのような意味があるのでしょうか。クルル鉤は、府中市内では2例目の発見ですが、他に事例を求めますと、長岡京跡(京都府)や但馬国分寺跡(兵庫県)をはじめ、全国で20数例が確認されているのみで、役所や寺院にともなう特に重要な建物(倉や門など)に使われたものと考えられています。そういった点からすれば、古代に武蔵国の国府が置かれていた府中市では、見つかるべくして見つかった遺物とも言えます。当調査区、あるいはその近くに、役所の倉や門などカギの備え付けられた建物があり、その管理に携わる役人が居住していたことを裏付ける重要な資料と言えます。



クルル鉤のイメージ



← 中世武家屋敷の物置 (『纂記絵詞』『日本常民生活絵引 第5巻』より)

国府の中樞施設を求めて

前身では、一九五四年に行われた片町遺跡の発掘調査が、国府跡研究の出発点であったことを紹介した。この調査結果に力を得て、国府跡の発掘は以後機会あるごとに発掘調査が実施されたのである。

当然のことながらそれは、国府の中樞施設である国府の所在地の探索にも大きな影響を与えた。当時、国府跡の候補地としては、御殿地（本町一丁目）、坪の宮（本町二丁目）、京所（宮町二丁目）、高倉（美好町三丁目・分梅二丁目）、高安寺（片町二丁目）が挙げられおり、このうち高倉と京所は一九六〇年代に二度にわたって発掘が行われている。従来の伝承や地名に頼った推定地を考古学的に解明する気運が持ち上がったといつてよいだろう。

高倉遺跡の調査は、一九五七年に市文化財専門委員であった菊池山哉さん（きんさい）が中心となって、五九年には明治大学・立正大学・東京学芸大学が合同で行っている。しかし、緑釉陶器や灰釉陶器などグレイドの高い遺物が出土したものの、国府跡といえるような建物跡などは発掘されなかった。

一方、京所は今日、国府跡と寺跡の存在が確実視されている場所である。一度目の発掘は一九六二年、菊池山哉さんが中心となって行われている。今日寺跡と推定されている部分で、建物の基壇らしきものを発掘したという。二度目は六三年、国学院大学の大場磐雄

さんの主導で、大國魂神社境内の土壇状の高まりが調査され、敷石などとともに、古代武蔵国内の郡名を記した多量の瓦類を発掘している。しかし当時、この京所は寺跡と考える意見が強く、調査目的が国府跡の探索ではなかったためあって、遺跡の性格はもとより、郡名瓦の位置付けも明らかにされずに終わってしまったようである。研究の進んだ今日の視点に立てば、郡名瓦の存在が付近に国府跡の埋もれていることを暗示しているのだが、寺院跡の存在に引きずられ、国府跡の存在は受け入れられなかったのだろう。

このように、一九五四年の片町遺跡の発掘に端を発し、国府の中樞施設である国府の探索も始められたのだが、埋蔵文化財に関する法令などが十分に整備されてない段階では、開発による遺跡の破壊を喰いとめたり、それに先立つ発掘調査を実施する手立てはなかった。また、地元の中高生たちに頼った発掘調査の体制では開発の勢いに対応することも難しかった。こうして一九五四年以来連年のように続いた発掘は、竪穴建物跡が広い範囲に存在することを明らかにし、庶民生活の一端を具体的に示したものの、国府跡の発見には結びつかずに途絶（とつてつ）してしまうのである。国府跡の継続的な発掘は、一九七五年の恒常的な調査体制の成立を待たなければならなかったのである。

（深澤 靖幸）



おおくにたま
大國魂神社境内で発掘された石敷
1963年、国学院大学が境内末社・宮之畔神社裏にある土壇状の高まりを発掘した。調査報告がなされていないので詳細は不明だが、石敷は土壇状の高まりの下部から見つかっていて、武蔵国の郡名を記した瓦類が多量に出土している。1975年以降の調査では、ここが国府を中心とした役所の一角であることを明らかにしている。

「おおーっ」「よくこれだけ集めたねえ。」「とても時間が足りないわ、また来ます。」
ふらりと足を運んだ常設展示室に驚いていらっしゃる来館者をよく目にします。
まさかこれほどの広い展示室とは予想もしていなかったのでしょう。

初めて来た方がまず私たちに尋ねるのは、「ここは何年前に出来たのですか？」
「ここは府中市の施設ですか？」といった質問です。「郷土の森博物館は開館して15年。府中市の博物館です。」と、お答えしています。

広い展示室の中には迫力ある大きな模型や標本、ジオラマがドーンと展示され、
その周辺に実物、複製資料を豊富に展示しています。それをざっと眺めて急ぎ足で
通り過ぎるだけでもまず最低10分はかかります。

農具や養蚕の道具を見て懐かしそうにお孫さんに説明している方、くらやみ祭りの
スライドに家族が映っていると喜んでいる方。ちょっと暗い展示室の雰囲気恐怖
がっとお母さんにしがみついて歩いている子、お気に入りの野鳥のコーナーへまっ
しぐらの子、クイズにチャレンジする子、はたまた宿題が出ていて一生懸命解説文
を写し書きしている子…などなど。年間7万人以上訪れるお客様の一例です。

博物館にいらした目的や過ごし方はそれぞれですが、実物資料を実際に見る学習
経験は博物館だからこそできること。今年度からは、見るだけでなく実際に資料に
触ったり使ってみるコーナーを、学校がお休みになった土曜日の午後に設けています。

百聞は一見に如かず。展示室にはきっと未知の発見と感動が待っています！私達
解説員もお待ちしています。さあ、でかけましょう、一緒に！（Y.Y.）



展示室から

展示探検

たびっとくん&たびがらす

発見と感動の館へ
ようこそ！

元気！

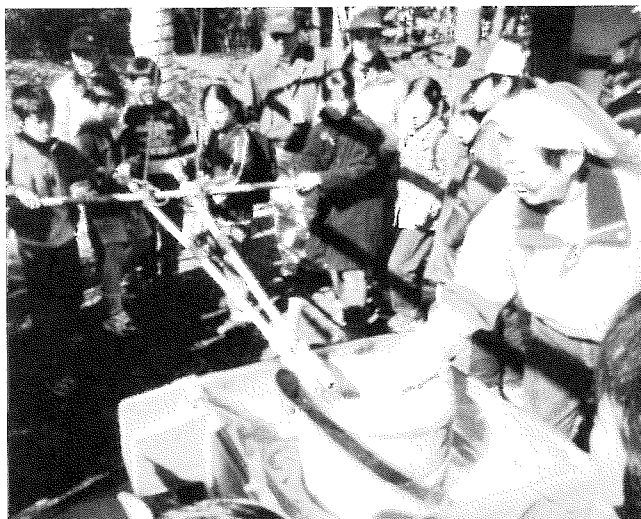
博物館ボランティアだより ②

郷土の森博物館の5つの
ボランティアグループのうち、今回は体験学習班の元
気ぶりを拝見。

博物館における体験学習
とは、展示をみたり解説を
聴いたりするだけではなく、
生活民具などの資料を用い
て、触れたり使ったり作っ
たり、自分の手や身体で感
じ取ってもらう活動のこと
です。このようなこともボ
ランティアさんたちとやっ
ていくことができました

ら、博物館活動の幅が広がるし、利用者の楽しみも増えるに違いありません。前回紹介の資料整理班の活動もそうでしたが、学芸員や内部のスタッフだけでは得られない新しい視点や発想も期待できます。それぞれが社会経験豊富で、「自分が楽しいからやってる」と言ってくれる人たちがばかりだからです。

活動の柱の1つは、毎月第2日曜の「ふるさと体験館」における「昔遊びをしよう」の主催です。竹馬・竹ポックリ・竹トンボ・竹ガエシ…、お手玉・折り紙・ヤジ



ロベエ・イトノボリ…。こうしたたくさんのレパートリーは、先輩格の「体験館」講師から教わったり、自分たちで相談したりしながら増やしていきました。

次の柱は、「石臼の粉挽き体験」。収蔵庫に保管されていた明治20年製作の石臼をメンバーが発見。さっそく使えるように再現したのはお見事でした。大きな取っ手を子供たちが順番に回していくと、コメがみるみるコナになりました。

もう1つは、以前から行なってきた昔の農具を使っ
てのコメづくり体験学習「こめっこクラブ」への参加
です。さすがに農業経験者は少ないのですが、子供たちと励ましあつての奮戦です。

評判を聞きつけ小学校・幼稚園などからの特別の依頼も増えました。子供たちが喜ぶ顔を見てしまうと、次は断れない人たち。「そんなに引き受けて平気ですか？」「できなくなりそうになったら、その時考えるさ。」（O.）